卑人 藤原鎌足

家安建次

青山ライフ出版

目次

卑人　藤原鎌足の登場……6
蘇我家の横暴……22
山背大兄皇子の失脚……36
境部摩理勢の最期……43
舒明天皇そして皇極天皇へ……61
山背大兄皇子の滅亡……65
大化の改新……79
入鹿殺害後……98
孝徳天皇新政権の発足……104
古人大兄皇子の死……107
大阪・難波への遷都……110
蘇我倉山田麻呂の罪……116
孝徳天皇二年（６４６年）……127

藤原鎌足を身分の低い卑人として物語を始める。
差別され卑化された卑人・藤原鎌足が何故に大化の改新を起こし、蘇我家を滅ぼして行ったかを連想して行く。

近代まで特権貴族として君臨した天下の藤原家の創始者・藤原鎌足は卑人と呼ばれ、差別されて現地人と交わる事もなかった。
だが聖徳太子の改革で、この身分の低い卑人・鎌足でも成績優秀なら学校に入る事も、役人になる事も出来る様になった。
そして鎌足は役人、そして大和朝廷のトップにまで上りつめていく。
そこには朝鮮を統一させた国民的英雄・金春秋、後の新羅の武烈王に操られる様に蘇我家を滅ぼしていく見えない糸があった。

・卑人　藤原鎌足の登場
・蘇我入鹿と山背大兄皇子
・山背大兄皇子の失脚
・舒明天皇そして皇極天皇へ

・山背大兄皇子の滅亡
・中大兄皇子と中臣鎌足
・大化の改新
・入鹿殺害後
・蘇我倉山田麻呂の罪
・古人皇子の死
・孝徳天皇新政権の発足
・孝徳天皇の死
・有間皇子の変
・斉明天皇の死
・白村江の大戦
・鎌足の死
・壬申の乱
・藤原家の隆盛

前編

卑人　藤原鎌足の登場

約千四百年前、ヨーロッパではすでに西ローマ帝国は滅び、隣国中国では隋は亡び唐が中国を統一していた。

その時代、日本では古代の大金字塔・大化の改新を成した卑人・藤原鎌足が登場した。

近代まで特権貴族として君臨した藤原家の藤原鎌足は少数民族の卑人と呼ばれる低い身分で差別され現地人と交わる事も無かった。

卑人とは魏志倭人伝に出てくる邪馬台国を作った卑弥呼にも通じる同じ民族であるが、ここ大和朝廷においては身分の低い体に入れ墨をしている少数の海洋民族の集団だった。

しかし、それも今は現地の平民には多勢に無勢、魚を販売する漁業権すら、すでに、奪われてしまって自分達の魚の食料を細々と取っているだけで有った。それで現地人の中に入って売春、博打、大道芸、そして外国から来た流れ者を使って人殺しをして金を稼いで生活していた少数民族であった。例えば恐喝や人殺しをして金を稼いでいるアメリカのマフィアの様な少数民族であ

った。

鎌足も幼い時から卑人として現地人とは差別されているのを感じていた。鎌足の父は神官だった。歴史上でも鎌足の神官という身分は有名であるが、朝廷の神官では無い。少数民族の卑人の神を祭る神官であった。最初は神官であったが、実際には卑人同志の争いの相談役、調停役さらに進んで博打、売春、人殺しを請け負う元締めの仕事に変っていた。

鎌足も幼心にも、父は漁業の仕事もせず、神官としての汚い元締めの仕事に嫌悪を感じていた。確かに神官であったが祭ってあるものは男根、男の性器その物であった。祭ってある男根が、どの様な意味であれ極めて野蛮な風習である。鎌足は父の生臭い仕事が嫌いでたまらなく決して父のようになるまいと心に決めて勉学に励んだ。

当時、聖徳太子の改革で優秀な人は平民でも学校に行けるようになっていた。中国に派遣された遣隋使として有名な小野妹子も同様に身分の低い者であった。

しかし平民でもない少数民族の卑人の子では、いくら勉学しても学校すら行けなかった。しかし、たまたま母の姉が現地人と結ばれたので平民の養子として学校に入る事が許された。

しかも聖徳太子の改革で学校の成績優秀な者は役人にもなれた。

例え卑人であったとしても特別に優秀であれば役人にもなれるかもしれなかった。しかし、学校の中では鎌足は卑人の身分がばれやしないかとビクビクしていた。だから決して卑人の食べる

生の物や、卑人の特有のしぐさや言葉、なまりは使わず、大和人のマナーをわきまえて、決してばれないようにしていた。

友達もできて楽しい生活が送れても、ふと、自分が卑人だと思うと暗い心になってしまっていた。

ある時、友達が集まって卑人の話題になった。「卑人は顔に入れ墨をして、怪獣を捕まえて生で食べるぞ。口の回りを真っ赤に染めて血をそそりながら美味しい美味しい」と、顔をひん曲げて卑人の食べる真似をすると「気持ち悪い、ウエー、ゲー」と言う声が聞こえて来た。「匂いまで卑人は違うぞ、臭い臭い」と。

鎌足は卑人の臭いを発しているのではないか、自分の事を言われたのではないかと思わず赤面した。その様な理由で鎌足は気の弱い内向的な性格になっていた。

この新しい学校では古事記・日本書紀が編纂されて歴史教科書となっていた。この教科書を開き見て鎌足は驚いた。歴史の始めの天上での天の岩戸の話に自分の祖先・天児屋根命が出て来たのだ。

天の岩戸だけではない、天皇の御先祖が天上から降りた時に付き添った五神の一人が鎌足の祖先・天児屋根命ではないか。

鎌足は次にはどこに祖先が出てくるのか歴史教科書を隅から隅まで夢中になって読みあさった。その後、幾ら探しても歴史に鎌足の祖先は出てこなかったが、歴史は隅から隅まで全て覚え

てしまった。
即ち歴史書には他の誰よりも優れて博学になった。
そして歴史書にふれて、卑人という事は隠していたが、気の弱い内向的な性格から勉学に積極的な性格に変っていった。

ある時、鎌足が学校に来ると豪華に装飾された馬車が門の外で停まっていた。見るともなしに見ると、相当な地位の在る貴公子が横にいる美少女の下に手を這わして抱こうとしていた。しかし美少女は必死になって足をバタバタさせて抵抗しているではないか！
そして貴公子はあきらめて馬車から降りてきた。鎌足は、こんな門前の神聖な場所で何と言う事をする。さぞ美少女も怒っているだろうと、馬車の中を見ると美少女は潤んだ目でその貴公子を見送った。
その美少女の愛くるしい潤んだ目は鎌足の心を突き刺してけして忘れる事ができなかった。学友にその貴公子の名を聞くと最高権力者・蘇我家の入鹿だった。帰りに鎌足が馬車を見ると美少女が馬車の護衛に守られて眠りながら入鹿の帰りをジッと待っていた。
この美少女と入鹿に鎌足は強いあこがれと嫉妬を感じた。
後に古代の大事変・大化の改新でこの入鹿を殺し蘇我家を滅ぼし鎌足は中央に躍り出るのであ

るが、彼が学校に入ったのはただ父親のようには成りたく無かっただけで、官使にまでは成る気はなかった。しかし歴史書に出て来た祖先とあの美少女と入鹿へのあこがれで、特別に優秀な成績を取って官使に成りたいと思うようになった。例え卑人であっても。

事実、聖徳太子の改革で成績が有れば誰でも役人に成れることが出来た。幸い役人の試験は歴史と漢文が必須で、それに鎌足は抜群の成績を上げていたのだった。何故に漢文も特別に出来たのか。それは漢文とは彼の民族・卑人の使っていた第二言語であったからだ。

どれほど鎌足が学問に秀でていたか……蘇我入鹿が鎌足と一緒の講座に列した時に鎌足が後から入ってくると、入鹿は起立して礼を交わした……と古い藤原家の家伝にある。

事実は小説よりも奇なりである。どこの馬の骨とも分からぬ鎌足に、学問が優れていると分かれば最高権力者の後継者で有る入鹿が丁重に頭を下げた。入鹿をわがままな暴君だったと後々、言われるが、最高の人格者でもあった。

入鹿は鎌足のような整った美男に比べればゴリラに似ていたが、キリリとした男前で男性的な魅力がその体格にあふれていた。

最高権力者の後継者で厳つい男でも有ったが、入鹿に媚びを売りに来る人には、適当にあしらう賢人でもあった。若い入鹿である、友とふざけて相手を中傷する事は有るが、けして人に嫌みは与えない人物の出来た男であった。